

TENOHASI

てのはし

地球と隣のはっぴい空間・池袋

会報誌第29号 2014年9月1日発行



8月9日 夏祭りのようす

2013年度活動報告 & 総会報告号

財政危機を乗り越えました！	2	インタビュー②	14
FIT for charityの寄付先に！	4	「生活応援スタッフって何してるの？」	
2013年度活動報告	5	最近の炊き出しで	18
インタビュー①	12	3.11被災地見聞ツアー	20
「ここはいいところだよ」		ご寄付御礼	22
		役員の役職交代について	23

巻頭報告… 皆さまのおかげで

財政危機を乗り越えることが出来ました！

を対象にしていますから、その人たちから料金を取るなんて出来るわけがありません。行政からお金をもらおうと思えば就労支援などの事業を受託するしかないのですが、就労できない人たちが私たちの支援対象で……。

そこで昨年の総会で事務局は、次の皮算用を発表しました。

「昨年度は支出が760万円あったけど、今年度は600万円に抑える。

昨年のカンパはTENOHASI史上最高の490万円だったけど、これをどうにかして500万円台に乗せ。繰越金300万円を取り崩して600万円を確保！

これでどうにか活動を継続させる。これまでよりも支援の質量とも下がるのはやむなし」

ということで、1年前の会報で、みなさまにこのようにお願いしました。

ここ数年のTENOHASIの財源は二つありました。

一つは、皆さんからいただいたカンパで、ここ数年は400〜490万円で推移しています。

二つ目は、世界の医療団・浦河べてるの家と共同ではじめた「路上生活状態にある障がい者のケアプロジェクト（東京プロジェクト）」に対する助成金で、2010年からの3年間、独立行政法人福祉医療機構から300〜500万円を受けていました。

しかし、助成金は3年間で打ち切られました。「3年したら財政的に自立してください」という趣旨だそうです。

もちろん、独立したいのは山々ですが、この活動は仕事も家もなくして貧困にあえぐ人たち

2013年度 TENOHASI会計報告		
*前年度との比較はホームページをご覧ください。		単位：円
前期繰越		3,144,002
収入	寄付金	7,243,461
	助成金	8,305,036
	合計	15,548,497
支出	炊き出し	1,125,397
	夜回り	85,762
	生活支援	1,576,790
	シェルター家賃	1,604,010
	シェルター光熱水通信費	414,397
	業務委託費	890,000
	事務費	321,780
合計		6,018,136
単年度		9,530,361
次期繰越		12,674,363

池袋の奇跡??

皆様ご存じの通り、昨年度のTENOHASIは、未曾有の財政危機に直面しました。

「今年度は助成金がないので、寄付金と繰越金に頼る運営となりません。寄付金を昨年より増やし繰越金を取り崩して600万円を確保し、支出を抑えられればTENOHASIはあと3年間は活動できます。みなさまのご支援が頼りです。資金カンパをぜひよろしくお願いします。」

こうして、外部には「お金ください！」と叫び、内部では「経費節減！」とがなり立てる1年が過ぎました。

その結果は・・・

2013年度決算

収入…約1559万円
支出…約602万円

支出については、目標金額ぴったり。スタッフ・ボランティアの皆さんの交通費を削ったり、生活応援の経費を制限したりと負担を強いましたが、みんなよく頑張ってくれました。

そして、一番の驚きが、収入。

財政危機どころか、なんと目標の3倍！
ありがたさとうれしさで、「池袋の奇跡だ」と震えました。

まず、みなさまからのカンパは、延べ413人から、合計約724万円。南は九州から北は北海道まで、全国から寄せられて今までの最高額を更新しました。

低賃金だったり生活保護だったりするのにも、毎月毎月数千円を振り込んでくださる方。

教会で寄付を募って毎月送ってくださいる方。

テレビで、新聞で見ました、と送ってくださいる多くの方々。

そして、幾人かの方からは、30〜100万円という多額の寄付をいただきました。

その中のおひとりからは「ずっと会報をお送りいただいており、会報やマスコミでTENOHASIの活動の発展ぶりを見て、信頼感を深めてきました」

というメッセージつきで。金額に匹敵する勇気を頂きました。

さらに、2月にはFIT for Charity（外資系金融機関の皆さんを中心とする実行委員会が行うチャリティマラソン）の寄付先選ばれて、約831万円という巨額の助成金をいただきました（次ページ参照）

どれも本当にありがたく、貧困と差別に苦しむ人のためにしっかりと使わねばと、身が引き締まる思いです。ありがとうございます。

おかげさまで、約1267万円を繰り越すことができました。

2014年度予算

収入…460万円
支出…940万円
差引…マイナス480万円

お金を大事に抱えていても仕方ありませんから、今年度は一

気に支援活動の拡充を図ります。その内容は

①生活応援活動経費を倍増して二人目の専従職員を雇用（14ページをご覧ください）し、支援経費も十分に使って、さらに多くの方を路上脱出・地域生活につなげます。

②寄付金が税控除の対象になる認定NPO法人取得を目指して、有給の事務パートを雇用。

今後みなさまに、寄付をお願いして460万円は集め、しかしそれに倍する資金を活動に使って、繰越金は2年半で使い切ってしまうという計画です。その先は・・・まあ、どうにかなるでしょう。

「TENOHASIは金があるからもういいだろう」とか思わずに（本当は年間2000万円くらいの活動資金がほしい）、今後もご支援よろしく願います。



TENOHASIのロゴが国立
競技場の電光掲示板に！

FIT for charity run の寄付先に選ばれました！

FITチャリティ・ランは、外資系金融機関の皆さんで作る実行委員会が組織するチャリティマラソンで、「社会的な意義や必要性が十分に認知されていない非営利団体の活動を支援する」事を目的としています。2013年度の寄付先8団体の一つにTENOHASIが選ばれ、なんと、約831万という巨額の助成金を頂きました。

過去にはビッグイシューや「自立生活サポートセンター・もやい」も選ばれたことがあり、その流れから選ばれたようです。他の寄付先団体を見ると、子どもの貧困にとりくむ「キッズドア」、児童養護施設の子もたちにアウトドア体験を提供する「みらいの森」、女性を中心とする人身売買に取り組む「ライトハウス」など、格差と貧困の問題に取り組む活動をトータルに支援しようという姿勢が感じられ、まさしく尊敬すべき社会貢献活動であると感じました。

この助成金で、TENOHASIは生活応援活動に新たな常勤スタッフを雇用することができて、支援活動は飛躍的に発展しています。本当にありがとうございます。

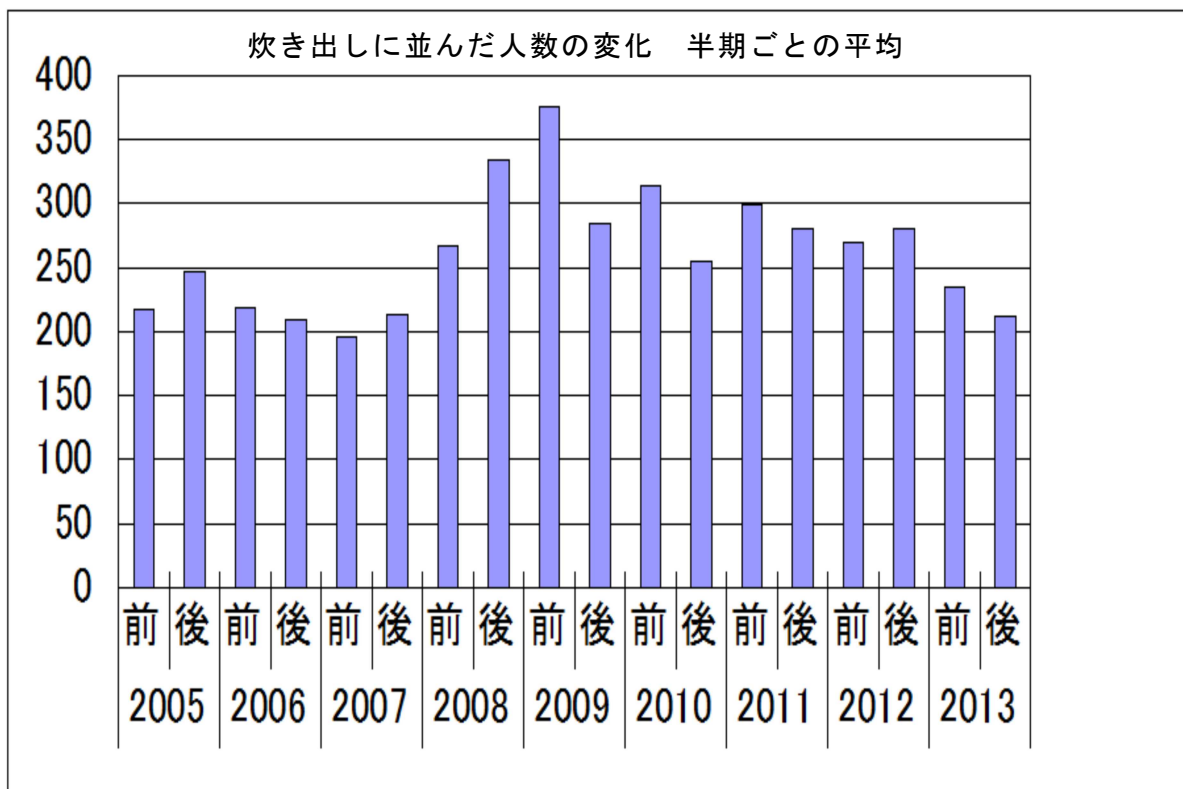


贈呈式

前列左端が清野事務局長

2013年度 TENOHASI 活動報告&総会報告

2014年6月2日に、特定非営利活動法人 TENOHASI の総会を行いました。そこでは、この団体が抱えるいろいろな課題や悩みが語られました。各セクションからご報告します。



炊き出しに並ぶ人の数は、ようやくリーマンショック前に近い水準に戻る

1, 炊き出し 太田英一・他

最初に、昨年度も、調理場所を無償で提供して下さっている駒込大観音光源寺さんのご厚意により炊き出しが継続できたこと、みなさまのご協力により一度も欠かさず温かい食事が配れたことに感謝します。

*光源寺で料理を行っていることはネット上では非公開ですのでご注意ください。

1, 並べられた人数は落ち着く毎月2回行っている炊き出しに並べられた人の数は、前期で235人、後期223人で、ようやくリーマンショック前の2005〜2007年頃の水準に近づいてきました(グラフ参照)。

これは池袋だけでなく全国的な傾向です。貧困率は年々上がっているのに炊き出しに並べられた人が減少した原因として考えられることは・・・

① これまでの数年間に、生活保護などの公的支援につながって路上を脱した方が増えた(各地の支援団体の活動の成果もあるでしょう)。

②復興需要や景気回復の影響で仕事に就いた方が増えた。

③それまで主流だった「元肉体労働者系」の方々は年々高齢化して生活保護をとるか亡くなつて減少し、新たな「派遣など不安定雇用系」の若年層は、従来の「ホームレス」像に強い抵抗感があったり、発達障がいや精神障がいなどを抱えた方は人混みが辛くて、炊き出しに並ばない・・・などが考えられます。

TENOHASIで路上脱出支援をしている方も、最近は「仕事さえあれば路上を脱することが出る」方は少数派で、「障がいがありながら適切な支援を受けられず路上生活になってしまった」方が主流になっています。

2. 大塚モスクさんのご協力

昨年度の大きなトピックは、大塚モスクさんの協力です。夏祭り、クリスマスなど合計5回、カレーやサラダ、ピリヤニ（パキスタンの炊き込み飯）などをご用意くださり、一緒に配食できたことはとても嬉しく楽しいことでした。当事者のみならずスタッフ・ボランティアも本場

の味を堪能させていただけたとに感謝です。今後も継続して協働していく予定です。

3. ボランティア

ホームページを見て新規に来てくださる方が多く、一回あたり平均約75人(前年度68人)、そのうち新人約14人(前年度10人)が参加して炊き出しを行いました。中・高・大学の「ボランティア体験学習」の一環として参加する学生さんが多いのも最近の特徴です。

積年の課題であった、「新人からリーダーへ」については、わずかながら進展が見られるようになりました。可能な限り細かなサポートを心がけ、ボランティア初参加の人の“アウェー感”を軽減すると共に、TENOHASIの宣伝やホームレス問題への啓発活動も行っています。

また、初参加の人は優先でご飯渡しなどの最前線を経験してもらおうことで、「ホームレス(状態)」の人の心理的垣根を取っていけるよう今年度もサポートを続けていきたいと思います。

活動の中心となるレギュラー

メンバーは、高校生たち「ヤング軍団」、仕事をリタイアした「シルバー軍団」に加え、20〜50代のスタッフが固定しつつあることも心強いことです。

ただ、「段取りがわかるコアスタッフ」と呼べる人はまだまだ限られています。コアスタッフになってくれる人は引き続き募集中です。

4. 片づけについて

今まで悩みの種だった夜の洗い物・片づけも、片づけだけに來てくれるボランティアも含めて参加者がおおむね10人前後が確保できるようになり、安定してきました。これからも引き続き参加の呼びかけを続けていきます。

5. 衣類配布・コーヒー配布

衣類は多くの方から寄付をいただき、毎回配布することが出来ました。個人だけでなく会社ぐるみで集めてトラック一台分を送ってくださったということもあり、冬物衣類は配りきれずにまだ倉庫にかなりの量が眠っています。

需要が高いのは靴・ズボン・下着・カミソリなどです。

コーヒーなどのドリンクも毎回30〜40リットルを配布しています。衣類をもらったらコーヒーを飲んで談笑しながら配食を待つという過ごし方も定着して、用意したコーヒーがあつという間になくなってしまうこともたびたびでした。

夏は熱中症対策のため、スポーツドリンク(もどき)を配っています。

衣類配布はまず順番に選んでもらい、1つもらったらまた並ぶという方式で行っています。しかし、割り込んだり、1度に2つ取る人が出ることもあり、当事者同士の小競り合いも数回ありました。

和やかにやりたいのは山々ですが、それだけでは円滑な運営が出来なくなり、効率化を優先すると素っ気なくなり、それが



揉め事の種となるジャンルを把握する必要があります。

2、医療相談 高桑郁子

医療班では炊き出しと並行して、今年も医療相談会を実施しました。

相談者は各回25名から45名程度で、男性が多く、女性も数名見られ、男性と共に相談に来る方もいました。

年齢別では60代が最も多く、その後50代、70代、40代と続きます。若い方で、ネットカフェなどに寝泊りしている方も数名いました。

疾患別では、上気道感染症が最も多く、次いで胃炎、皮膚疾患、下痢、高血圧症、腰痛、関節痛などでした。内科疾患の悪化や治療の中断、精神疾患などで医療機関受診が必要な方には紹介状を発行し、ソーシャルワーカーと連携して受診ができるようにしました。

相談中の救急搬送は1件で、脱水症状の方を医師の判断で搬送しました。

多くのボランティア医師が積極的に参加して下さり、看護師、サポーターも少しづつ増えてきています。

薬品等の物品はカトリック医

師会のご支援を頂き、例年通り相談者の方に提供することが出来ました。

水曜日の夜回りには医師2名が同行し、適時必要な方には医療機関への紹介状の準備をして頂きました。

昨年度の反省と今後の課題は以下の4点です

1. 薬の補充と事務所からの運搬を担う人手が足りず、一部に負担が掛かってしまったこと。

2. 多くの医療従事者が待ち構える相談会には行きづらいつの意見を受けました。

気軽に相談に来れる雰囲気、若しくは私達から話しに行く体制も考えていく必要があります。3. シェルターにいる方の健康管理や他地域の支援団体からの医療相談実施要請にどう対応していくのか。

4. 月に一回、医療班交流会（勉強会）を開き、支援方法の検討を図ると同時にスタッフ間の交流を持つ。

今年度は益々交流を進展させ、複雑化してきている路上生活者支援に共に取り組んでいきたいと考えております。

3、生活相談と生活応援活動

坂内孝雄・吉野朱実・小川芳範

炊き出しと並行して行っている生活相談にいらした方、医療相談を受けて路上脱出を勧められた方、水曜日の夜回りで相談を受けた方などの相談を受けて、路上脱出の支援と、安定した地域生活を営めるまでを支援するのが生活応援活動です。

炊き出しでは毎回2〜6人の相談を受けます。相談の結果、生活保護や自立支援事業の利用を希望される方は、TENOHASIのシェルターやネットカフェなどに泊まっていたいただき、週明けに役所に同行して申請します。

相談したけれど「まだ自力でがんばるから」という方や、「大部屋では神経が持たないから無理」ということで支援には至らない方もいらっしゃいます。

*申請後の継続支援については、〇〇ページの「小川さんインタビュー」をご覧ください。

支援対象者の中で、若年の発

達障害・パーソナリティ障害を疑えるような症状をお持ちの方の割合が増えています。高齢化した肉体労働者の問題であった時代は終わりつつあり、「未知の領域」、すなわち「母子の心理的分離を経ずして両親の末期を迎えてしまった人々」や「一度も働いた経験がないまま、実家や地元の支援機関との折り合いがつかなくて飛び出してきた方」への対応を試行錯誤しながらやっています。

昨年度は、路上生活を脱した後の「住まい」に関して、「貧困ビジネス」の施設や山谷のドヤ（簡易旅館）だけでなく、他団体や大家さんとの連携でアパート、施設、シェアハウスなど、多種多様な選択肢が見えてきた年でした。今年度は、新たに「つくろい東京ファンド」のシェルター（もやいの稲葉さんを中心とする新団体が運営する個室シェアター）も使えるようになるので、さらに一人一人にあった住まいを提供できると思います。

また、この年末年始に行われた「ふとんで年越しプロジェクト」では、クラウドファンディ

ングでの寄付金を元に、池袋だけでなく新宿・渋谷・山谷などの支援団体と連携して、宿泊まりの場所の提供とその後の生活支援を行うことが出来ました。

また、(各支援団体でその受け止め方に温度差はあるにせよ)、年末年始にとどまらない、恒常的なシェルターの必要性、および、「ハウジングファースト」の概念についての共通認識をもたらしきつかけとなったのではと感じています。今後は、自前または共同の宿泊施設を拡充し、特に女性が利用できる施設を持つことを追求していきたいと思います。

課題①は、相変わらずシェルター管理とリスクマネジメントです。

TENOHASIのシェルターはワンルームマンションで、スタッフが24時間常駐できるスペースも人件費もありません。そのため昨年度も、スタッフ不在時に、ストレスや酒・障がい絡みでのケンカ・暴力事件や器物破損事件が何回もありました。

安全のため、またスタッフの疲労が蓄積したために一時閉鎖

したこともありましたが、「助けてほしい」という声を無視できず、なし崩しに再開ということもありました。

保険に加入し、今年度から常勤スタッフを増やすなど対策は立てていますが、今後も火災なども含めた不慮の事態のリスクを抱えていかざるをえないでしょう。

しかし、多少のトラブルは「チャンス」と捉える視点をもちたいと考えます。トラブルは各当事者独特の人間関係のあり方を見て取る貴重な機会でもあり、それを積極的に利用して、支援の方法を探っていきたいと考えています。

課題②は、「居場所作り」です。

路上生活から首尾よくアパート入居にこぎ着けても、昼間にやることなくアルコールやギャンブルに依存してしまうなど様々な課題を抱える方がいらつしやいます。

東京プロジェクトでは料理教室やパン作り・運動などさまざまな日中活動プログラムを行っています。人間関係などからそこに参加しづらい方も出ています。そんな方たちの「居場所

所作り」「生きがい作り」を地域の資源の活用して推進していく必要があります。

また、「障がいがあることに気がつかず、ずっと苦労してきた」方が障がいの認定を受け福祉を利用できるようになることはとても重要な支援なのですが、「いったん、障がい者となったら、出会えるのは同じ障がい者か支援者しかいない」というのも事実です。これを変えていきたいと考えています。

課題③は、支援者個人の課題であるのですが、支援対象者からの要望が、「甘え」の領域に属するものであるのか、本当の「ニード」であるのかを見極めることが出来ない、ということがあります。もちろん、簡単に決め

られることではなく、手探りの試行錯誤を続けていくしかないのですが。

課題④は、「障がいなどの事情から生活保護受給やアパート入居がなかなか認められず、いつまでも落ち着いた生活にたどり着けなくて宙ぶらりん状態になる当事者」の問題です。

医療、福祉、法律などの専門家からの意見書・支援計画書などを用意・活用して福祉当局や大家さんと交渉し、早く落ち着いた生活にたどり着けるように支援していきたいと考えています。



4、東京プロジェクト

中村あずさ

TENOHASI、世界の医療団、べてぶくろ（浦河べてるの家）、訪問看護ステーションKAZOC（かぞつく）が連携して行う「東京プロジェクト（ホームレス状態の人々の精神と生活向上プロジェクト）」も5年目に突入しました。生活相談の報告と重複する部分が多いので、主にそれ以外のことについて報告します。

■昨年度は、スタッフ不足から常にスタッフが燃え尽きの危険にさらされ、綱渡りが続いていました。

今年4月からは、TENOHASIに小川芳範さん、KAZOCに山内泰郎さんという2人の精神保健福祉士がフルタイムで配属されて、支援の効果が上がっています。

- ・べてぶくろが7月末で「ふぁみりあ」というシェルター運営を終了します。
- （グループホーム「しずく」は継続します。）
- ・KAZOCは利用者の増加に伴い、看護師を募集しています。

■相談援助について

4月から相談来所者が激増し、対応に追われています。精神的な障がいを抱える人が多く、行き場の確保に難儀。小川さんが配属されたTENOHASIのシェルターは常にフル回転の状態です。

その一方、スタッフの支援と、KAZOCの訪問看護により、生活保護でアパート生活へ移行する人が増えてきました。それらの方が「地域住民」となり、またTENOHASIの活動にボランティアとして参加する人も増えている印象があります。

■日中活動の現状

平日日中、多様な活動を開催しています。運営するボランティアは増えてきましたが、相変わらず人手不足。引き続き募集しています。

①池袋あさやけベーカーリー

店主・山田さんの協力のもと、毎週水曜日に当事者メンバーが集まって夜回りで配るパンづくり、おにぎりづくりを行っています。*活動報告はブログで行っています。

②「さざえ堂」のお守りづくり

西巣鴨の大正大学が地域貢献の一環として作られた「さざえ堂」で配布するお守り作りを受託し、メンバーが作っています。

③農作業

南房総の泉水さん宅に毎月行って自然農法で米や野菜を栽培しています。

④坐禅

曹洞宗のお坊さんのご協力により月に一度坐禅の会を開いています。

⑤調理師さんによる料理教室

高石さんのご協力により、プールの調理師さんたちが料理教室を開催して人気を集めています。

⑥フランス料理教室

安い素材で作るフランス家庭料理教室を、世界の医療団の武石さん、ファニーさんの協力により開催しています。

⑦運動・フットサル

泉水さんのご協力で、バトミントン、バレー、フットサルなどを行っています。また、ビッグイシューさんと共同して、月に2〜3回フットサルを四谷ひろばで開催しています。

⑧映画上映会

佐藤恵さんにより、毎週行わ

れていましたが、5月いっぱい終了。

⑨ライブハウスはなま

ヒーライトネット（江戸川区の精神障害者当事者グループ）のみなさんがうたごえ喫茶を開催しています。

⑩勉強会

いろいろなテーマで、六郷さんによりたのしい勉強会が開催されています。

⑪当事者研究

べてぶくろの向谷地宣明さんや当事者メンバーにより開催されています。

⑫継続面接

臨床発達心理士の森さんによる面接相談を行っています。

⑬その他

不定期で遠足。
新企画として、アートのワークショップをやりたいというフランス人がいて検討中。
ほかにも企画募集中。

■今後の課題

改めて東京プロジェクトで取り組む課題やビジョンミッションを整理し、各団体との連携の在り方を工夫したいと思います。

5、鍼灸班 (TRUST)

石崎卓

1、公園での鍼灸治療

炊き出しのある第2・第4土曜日に、公園の一角を使って無料の鍼灸治療を行っています。

スタッフは受付が2〜3名、鍼灸師は3〜4名がほぼ毎回参加し治療時間は2時間。患者さんは平均9、4人でした。このスタッフとこの時間では10人が限界で、ときには希望者が多くて治療しきれない人も出ました。

テント・ベッドなどの機材は近くに作った「東池袋四丁目はりきゅう院」からリヤカーで運搬しています。運搬設置をいつも手伝ってくれる人や手が足りないとき一時的に手伝ってくれる人たちが、患者さんを含めて色々な人のお世話になりました。

2、3・11見聞ツアー

第2弾を6月に、第3弾を10月に行いました。また1月には「放射線と歯」講座第1回を行い、脱原発に向けてできることを模索しました。第4回を今年8月に行いました(20ページ参照)

3、今年度の活動

4月から配食開始が19時から18時に早まったことにより、鍼灸の治療開始も一時間早め、終了も合わせるようにしました。しかし、そのため開始時間間に合わないスタッフが出て、治療できる患者さんを昨年並みに維持するのが厳しい状況となっております。

鍼灸の治療(受付も含めて)は、今の症状をどうにかするだけでなく、患者さんの心の問題も解決に導くものですが、一人当たりの受付・治療時間が短いと、なかなかできません。

また、昨年度に続き患者さんに生保の方が増えてきました。

4、東池袋四丁目はりきゅう院

鍼灸班の活動拠点である「東池袋4丁目はりきゅう院」の経営問題が大きくなってきました。

当初5名いた治療者も新規開業等により離れていかれてこの先3名まで減少する予定であり、併設していた介護事務所も今年度中には分離にすることにしました。今後治療院をどうするか検討中ですが、公園での鍼灸治療を続けるためにテント等の荷物置き場確保は絶対条件である

ため、その方法を検討中です。

5、今年度の方針

(1)生活保護の方で、四丁目院に来ることが可能な方は来ていただくようご案内しようと思っております。それにより公園での患者を減らし、公園でより丁寧な治療ができるようにします。

(2)鍼灸テント等の倉庫料金の捻出をしたいと思います。また、テントの修理代や暖房の燃料費、照明費等も考え、そのため会費制の導入が可能かどうか等、検討していきたいと思っています。

6、マッサージ班

加藤毅、橋本邦恵

1、継続して出来たこと

炊き出しの日のマッサージボランティア。1回あたり平均6人の方がマッサージを受けられました。皆さん優しく公園に行きたびに心が癒されます。待っていてくれる人もいるので、なおの事、公園に行くのが楽しいです。

2、新しくできたこと

他のボランティアのマッサージ

ジの技を盗みました。

3、感謝したいこと

利用者に喜んでもらえること。マッサージボランティアの場が与えられていること。視覚障害があるため社会に貢献出来ないと思ってきましたが、マッサージという形で多少なりとも貢献出来ているなら、私にとって何よりも光栄な事です。

4、問題点

地面にマットを敷いて施術しているのですが、風が吹くとマッサージを受けている方の顔に、ほこりや枯葉が飛んで来るのが気になります。

5、これから

より満足度の高いマッサージと会話を目指したいと思えます。

6、心に残ったエピソード...

路上生活をしている方からアロマキャンドルと小物入れを頂きました。ご自身の生活も大変なのに「いつもありがとう」と言う言葉と共にプレゼントしてくれました。クリスマスには頂いたキャンドルを灯し、うれし泣きをしてしまいました。

7, ほっと友の会

稲見麻里

1, 感謝

今年度も、1年間、無事にほっと友の会を運営できたこと、てのはしの皆様に感謝いたします。

また、今年度もカトリック池袋医療班さんに活動資金の寄付をいただき運営することができました。この場をおかりして、感謝申し上げます。

2, 参加者データ

スタッフは固定の5人がいて安定していました。当事者の参加も10人前後で、安定しています。去年、目標にあげた新規のメンバーの勧誘もそこそこできました(1年間で25人新規参加者)。1年間を通して、常連のおじさん達の人生も少しずつ変化しています。

3, 今後の課題

①頼りになるスタッフの確保。頼りになっていたスタッフが、昇進のため、今年度から来られなくなってしまうので、彼女のかわりになる人を最低1名確保したいと思っています。

②ボランティア参加のルールをはっきりさせ、ほっと友の環境を守っていきたいと思います。

*ボランティア参加のルール
・「大人として人の話が聞ける」人。
・炊き出しや夜回りを最低1回は経験している人。

・4時40分までに公園に来る(遅れての途中参加はなし)。
・ボランティア枠の上限は2名まで。先着順。定員オーバーが不安な人は事前にメール等で申し込む。

○4, 今年の方針

引き続き、おじさん達にとつて、居心地の良い、心の内をしっかりと語れる場をつくっていく。ここがきちんとしてきたかできないかがほっと友のすべてだと思います。毎月が勝負!だと思っても今年も頑張りたいです。

また、個人的な目標にはなりますが、てのはしの他の班の方々の交流も大事にしていきたいと思っています。一度、ボトムにお邪魔しただけで、当事者の方との顔が以前よりつながり、公園でも親しみをもってほっともに近づいてくれる人が増えました。

8, 夜回り

小川浩一・吉野朱美・岡室恵

1, おにぎり作り

毎週水曜日の夜回りで配布するおにぎり100〜150個をシェルターで作っています。

参加メンバーはほぼ固定していて、当事者メンバーが中心です。新しい方が「おにぎり作りから参加したい」と希望されることもよくあるのですが、狭いこともあり、継続的に夜回りに参加されている方に限定しています。

今後の課題としては、障害のある当事者スタッフや女性スタッフに対する配慮が不足する場面があったので、継続的な注意が必要です。

2, 夜回り

毎週水曜日の21時半から、池袋駅前公園で、シェルターと「池袋あさやけベーカリー」で作ったおにぎりやチラシを並べた方に配布しています。その場で生活相談を受けてシェルターに入る方も。

昨年度、おにぎり配布に並べた方は平均60名でした。昨年度より11名減少で、ピークだった2009年の131人と

比べると半減しています。

そのあと4コースに分かれて歩きながら出会った方におにぎりやパン・チラシを渡し、生活相談も受ける「夜回り」を行っています。夜回り出会った方は平均102人で、昨年度の101人とほとんど変わりません。ピークだった2010年の126人と比べて減少率が低いのが課題です。

各コース別の特徴は・・・
東口・段ボールハウス率が高い。路上生活暦の長く、良くも悪くも現状に適応した方が多い。
西口・東口よりもさらに「ベテラン」が多く、おにぎりも受け取らない人が多い。

池袋駅構内・路上生活暦が浅い人が多い。なりたての人も多く、見分けが難しい(間違えて怒られたことも)。何人か「ベテラン」の女性もいらして、継続的に関わりを持っている。

各コースのリーダー(引率者)やサブリーダーは、ほぼ固定化されていますが、西口に関して不安定で回れないことがあります。継続的に参加して、リーダーを務めてくれる方を引き続き募集しています。

生まれかい？昭和25年。生まれたのは岩手だけど、小さい頃に引っ越して東京で育ったんだ。

中学を出てすぐ就職した。その頃、中卒は「金の卵」ってもてはやされてね、求人はいくらでもあった。機械の工場に入って10年ちよっと居たね。それから渋谷のガード

をやってきたんだな。

ところがさ、おふくろが寝たきりになって、俺が働кинаがら面倒を見ることになったんだ・・おしめ替えて、ご飯食べさせて、大変だったよ。年の離れた弟が居るんだけど、こいつが何もしない。手伝うどころが金借りきて。俺もストレス解消したくて遊ん

なかった。

最初の頃は炊き出しとか、エサ取り（コンビニの廃棄弁当などをもらうこと）で食べてたから金なんかなかった。アルミ缶集めると金になるって聞いて、缶（自販機のゴミ箱などからアルミ缶を集めてリサイクル業者に売ること。最近の相場は五百個で千円く

いじばいごうじいじろだよ

池袋で10年以上路上生活をしていたさん。アパートに入ってからいつとき調子を崩していたのですが、最近はいじぶよくなつたと聞いて、インタビューしてきました。

*プライバシー保護のため一部を変えています。

下にある立ち食いそば屋で6年くらい働いた。面白かったよ。夕方になるとサラリーマンや学生や芸能人がひっきりなしに来て人が途切れないんだ。野球選手の別所とかよく見たな。でもさ、やっぱりきちんと働こうと思って、最初は鉄工所、次に工具作りの会社に入った。ここはずいぶん長く居たね。ずっとものづくり

だから借金もかさんで、だんだんいやんなつちやんたんだな。最後は弟と大喧嘩して家を出たんだ。弟は「出るなら二度と帰ってくるな」って怒ってさ。それが50歳の時だから15年くらい前だね。

それから路上生活。何も考えずに1日1日生きていくだけだったね。10年以上。にっちもさっちもいか

い）もやったな。

（読み捨てられた週刊誌などを露天商に売ること。最新号で1冊50円くらい）やるようになった。本

夜は公園とかで寝ていたんだが、知り合いが世話してくれて、サンシャインの公園のテントが一つ空いたから入れてもらったんだ（*2000年代の初めから排除の動きが強まって公園のブルーシートテントは一切新設できなくなり、誰かが出たところにしか入れなくなつた）。あんたも夜

回りで来たろ。あのテントだ。そこで仲間ができた。掃除の仕事しているやつが居て、よく酒をおごってもらったよ。いろんなやつが居たけど、そこで死んだやつが多いな。

しばらくそこに居たんだが、いろいろいざこざもあってね。西口で排除されて宿無しになったやつが居たから「じゃあそいつにテントをゆずる、俺が出て行くから」って言って一匹狼に戻ったんだ。

それからあちこちをさまよつた。上野・浅草・大塚・錦糸町とか。山谷は行かなかった。今はみんなドヤ（簡易旅館）で福祉もらっているけど、前はおっかないところだったんだ。池袋とかの方が優しくいいよ。

生活保護？ 事故で骨折したとき、しょうがないから役所に行つて保護もらつて病院に行つたんだ。そうすると役所が決めた寮に入れられてさ、いわゆる貧困ビジネスっていうヤツ。保護費ほとんど取られて、くれるのが1日1000円。これで昼飯とタバコを買っていうんだ。6時には

夕飯だからそれまでに帰らないといけない。飯だってろくなものじゃないし、治る前に出ちゃった。

路上生活は自由奔放なんだよ。その代わり、一日中考え続けることは、腹減ったく酒飲みたい、それだけ。

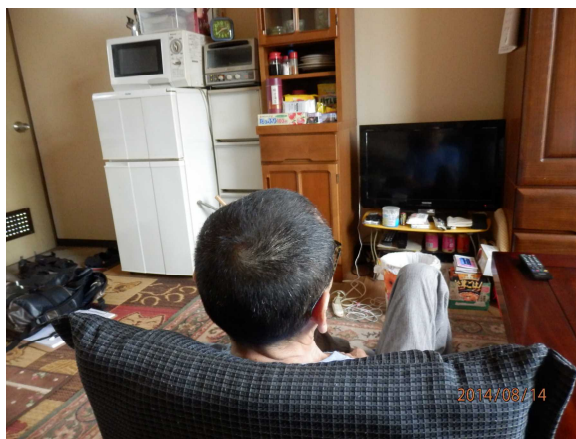
でもだんだん身体がきつくなってきた。だから2011年の終わり頃、てのはしの炊き出しで坂内さんに相談したんだ。てのはしは前から知ってるから変なことしないだろうと思って。そしたら「わかりました。アパート入るまで面倒見ます」というから、「じゃあお願いします」とって頼んだんだ。

その日からののはしのシェアルターに入った。あんな気楽なところはなかったね。風呂は入り放題、洗濯はし放題、飯も食い放題。俺は立ち食いそばにいたから、料理が得意なんだ。坂内さんが「何食べたいですか」とって聞いて材料を買ってきてくれる。米と調味料はたっぷりあるから、それでいろいろ作ったよ。

それ見て坂内さんが「これ

ならアパートでも大丈夫」って思ったんじゃないの。2週間したら来て「アパート決まりましたよ」とって。場所とかの希望？何も言わなかったよ。坂内さんを信頼して100%お任せですから。

で、この練馬のアパート見せてもらって、すぐ契約書を書いて、その足で区役所に行って生活保護を申請して、それから決定通知が来た。トントン拍子にアパート入居まで行ってびっくりしたよ。安心したね。



生活に必要なものはだんだん買いそろえた。鍋釜・調味

料・テレビや洗濯機とか、自分なりに安くてもいいものを選んでそろえてたら気持ちに余裕が出てきた。

ここはいいところだよ。大家さんがいい人で親切だからいろいろ気遣ってくれる。静かだしね。最初は静かすぎて眠れなかった。それまで脇をガンガン車が走っているようなところで寝てた。逆に静かで静かだ。

安心して、毎日テレビ見ながら酒飲んでたら身体がすっかり衰えちゃって、去年の10月にはとうとう歩けなくなって救急車。医者に「このまま酒飲んで死ぬか、酒やめて生きるか、どっちか選べ」と言われて、「酒やめます」とって答えたんだ。

それから訪問看護を頼むことになって、いまは毎週来て貰ってる。血圧見てもらって、病院に付き添ってもらったり、買い物を手伝ってくれたり。有り難いですよ。

酒はもう一切やめた。三食自炊して運動もするようになったら血糖値も下がってどんどん元気になってきたんです

よ。

今、足りないもの？いやいや、上を見ればキリがないからね。「自分なりの最低限の生活」をやっていますよ。

これからの希望？・・・今の生活を壊さないこと。みなさんの親切のおかげで、こうして今はアパートを借りて生活できているんだから。人の親切を大事にして、その親切に金では返せないから気持ちで返すように努力していきたいね。

てのはしへの要望？・・・今のままでいい。あんたもいろいろ大変でしょ。この前の炊き出しでも公園でケンカが始まった。・・・がんばってください。



窓からの景色

TENOHASI 新スタッフ 小川芳範さんにインタビュー

生活応援スタッフって何してるの??



炊き出しの生活相談 後列右が小川さん

てのはしの長年の悩みは生活応援活動のマンパワー不足です。なぜ不足かというと、単純に「お金がないから」。

長らく、理事の坂内を唯一の常勤スタッフ（報酬の低さはどんなブラック企業にも負けない！）として路上脱出と地域生活定着の支援を行ってきました。しかし、この2月にフィットチャリティランから約831万円という巨額の助成金を得て、のどから手が出るほどほしかった新しい常勤スタッフ（最低賃金をクリア！）を迎えました！その新スタッフ・小川芳範さんにインタビューです。

Q 4月からてのはしの生活応援スタッフとして働いてもらっているわけですが、実際のところ、毎日何をしているんですか？

そうですねえ、いざ説明するとなると難しいですね。（しばし沈黙）それじゃあ昨日何してたかお話ししましょうか。

私は基本的に毎朝東池袋にあるてのはしのシエルター（通称ポトム）に通勤してくるのですが、その途中の地下鉄車内で携帯が鳴りました。最近支援して

いるAさん（女性）からです。「ちょっと相談したいことがあるんですけど・・・あの人（彼氏のBさん）なんにもわかってないんです・・・」。「ごめんね。いま電車だから、20分後にいつもの公園に来てくれます？」。

電話を切って、何があったのかなと考えていると、そこにまた電話です。「Bさんと連絡つかなくて困ってるんですが・・・」。今度はBさん担当のケイスワーカーさんです。最寄駅でいったん降車し電話を掛け直して、次の電車で池袋を目指します。

いったん池袋に着いたら、駅から約束の公園へ向かう途上、「渦中」の人Bさんに電話して、その応対ぶりから心中を推察します。

さて、公園には疲弊した表情のAさんがベンチでぼんやりしていました。AさんBさんお二人の問題は（少なくとも部分的には）Bさんにたいする役所の対応についての誤解から生じているようだったので、役所側の意向、役所のサービスを使ってできること、私たち生活応援班がお手伝いできることなどを説明し、考えうるいくつかの選択肢

を提示したうえで、どういう道を選ぶかを決めるのはあくまでAさんご本人であることを伝えて別れました。

次は区役所です。Bさん担当のケースワーカーに会い、二人の状況や心境について情報共有を行い、今後の支援方向について相談しました。内容ですか？オフレコですね(笑)。

区役所からボトムへの途中、最近アパートに入られたCさんを訪問することにしました。Cさんは、どう表現したら良いのか、謙虚さゆえの孤立傾向がある方で、定期的な声掛けが大切なんです。ある地方都市で30年間タクシー運転手をしていたのですが、五〇代半ばで退職、こつこつと貯めた虎の子貯金をもって上京し、風の吹くまま気



の向くまま、東京で放浪生活を始めたそうなんです。ところが、路上生活は思っていたよりお金がかかり、まもなく所持金は底をつきました。マクドナルドの店先で冬の寒さを凌いでいるときに支援団体から声を掛けられて、多摩の方で生活保護を受けることになりました。アパートでの一人暮らしは4年間ほど続いたのですが、徐々に外部とのつながりがなくなり、気がつけば缶酎ハイ片手にぼんやりテレビ画面を見つめる毎日。ここでCさん、なんと「こんな暮らしをしてはいかん。もう一度路上に戻らねば」、そう決意したそうです。支援団体の方たちの心配をよそに生活保護を辞退して、凍てつく早春の路上に飛び出していました。そして3

か月ほどが過ぎた5月のある夕方、公園に動けなくなっている人がいるとの通報がてのはしスタッフの元に届きました。非番で自宅に居られた坂内さんがまず現場に駆けつけて、その後私も現場に到着すると、蜂窩織炎(ほつかしきえん・細菌に感染して皮膚が化膿する病気)で、腰から足先までが赤黒く腫れ上がり、立ち上がるのもやっというCさんが公園脇の路地にへたりこんでいました。大きな事情について聞き取りをしているところに、救急隊が到着。脚の具合を見ようと隊員が靴下を下げてみると、出るわ出るわ、蛆虫がポロポロとこぼれ落ちて、靴の周りの地面が虫で埋まるほどでした。あれはすごかったです。入院して検査を受けたら初期の肝硬変を患っていることも判明しましたが、劇的な回復ぶりです。退院し、ボトム滞在を経てアパートに入られました。というわけで、前と同じことを繰り返さないためにどうしたらいいか、ご本人と相談しながら探っている最中なんです。

一つわかったのは、Cさんは大の将棋好きということでした。それで、将棋を使ってコミュニケーションを図ろうと思いましたが、ボトム滞在中にパソコンでの将棋を覚えられて、これでも構わないから将棋をしたいとおっしゃったので、一緒に中古パソコンを買いに行き、ついでにアパート入居祝いに私から将棋ソフトをプレゼントしました。

昨日は「どんな具合ですか？」と聞きに行ってみました。パソコンを所有するのは初めてで、現在のところただの将棋ゲーム機ですけど、PCにも興味持ってくださいたら嬉しいですね。

そうそう、さっきCさんから「どこ行ったら除草剤ありますか？」という電話がありましたよ。アパート入居時に「軒先の草むしりをお願いします」と大家さんに言われたので、真面目かつ合理的なCさん、除草剤で一網打尽を目論んでるようです。

Cさんのアパート近くの区民ひろばの日中プログラムに将棋がないかチェックして、ボトムに着いたらもうお昼近くでした。現在、利用者が2人居るんですが、どちらもお飯は作らない。お米の炊き方は覚えてもらいましたが、ほっといたら何も食べないでいるか、納豆と卵だけで食事が終わっちゃう。それで栄養をつけてもらうために料理です。昨日は貝だくさんの豚汁と、辛党の利用者さんリクエストの麻婆豆腐を作りました。

お昼は皆で一緒に食べます。気取った言い方に聞こえるかもしれませんが、食事はソーシャ

ルワーカーにとつては情報の宝庫です。箸の持ち方から食べ物を口へ運ぶ仕方、食べる速さやおかずを食べる順番、食事中心の会話の有無、粗相をしたときにどうするか等々。その人がどんな家庭どんな生育環境の中で暮らしてきたのか、どんな性格でどんなことにこだわりを持っているのか。人を知るのにこれほど良い方法ってないです。そこからその人の人となりについてアセスメントできることが山ほどあって。それから、初対面の方でも、いちど一緒に食事すると、硬さがとれるというのか、「地」が出てきますね。

ある意味、ポトムでの生活それ自体がグループワークなんです。見ず知らずの他人どうしが生活を共にすることで、一人ひとりの対人関係のパターンないし特性が表にあらわれてきます。そうした、各個人に固有の対人関係のあり方というのは、見方を変えれば、彼らが抱える生きづらさをもたらずまさにその原因でもあって、ポトムではそれが生身の他者に向けて表に出てくるわけです。それは危険なこと、避けられるべきこと

ように思われるかもしれませんが、それで構わないんです。私たち支援者はそうした「危険を孕んだ」自己表現を（ほとんど意図的に）引き出して、彼ら自身がそれに気づいて、取り組む手伝いをするんです。PCに向かって交通費や諸経費なんかを入力しながら、私たちは「待って」います。

加えて、ポトムには生活訓練という一面もあります。「〇〇くん、野菜炒め作ってみようか。じゃあまずニンジン切ろうか」ってかんじで、坂内さんは、包丁を握ったこともない青年をあれよあれよというまに台所に立たせてしまいますよ。食事作り、洗濯、掃除、ゴミ出し。なんでも一緒にやって覚えてもらうんです。ポトム滞在者の多くは複雑な生育歴をお持ちで、基本的な家事を知らない人が多いです。年齢六十過ぎまで、一度も炊飯器使ったことがないなんてザラです。

Q どうしてですか？家が大変だったら家事の手伝いをさせられそうなもんですが。

ネグレクトと呼ばれるような

生育環境で大人になった人が多い気がします。それから、ストレスのきわめて高い家庭環境、「試しに何かやってみる」という余裕のない環境での生育を想像させる方も多いです。何をするにも急かされ、しくじれば仮借ないこき下ろしが待っているような環境。あえて手を出さないというのは、彼らにとって生きる術であったのだとも思います。

昨日の話にもどると、午後からは、ポトム滞在者の方々を八ナマイ（料理教室や体操教室などの日中活動の場）に誘い、一緒に歩いて行きました。食事と同じく外出や散歩も人を知る格好の場となります。

ポトム近くの大塚台公園には蒸気機関車が置いてあるんですが、大きな車体を前に「こんな列車に乗って上野に着いたの？」って声を掛けてみる。すると、集団就職で上京したときの話だとか、当時の家庭状況なんかへと話が広がるんですね。「ご両親が駅へ見送りに来てくれたの？その頃、お父さんどんな商売してたの？」とか。相談室のテーブルで対面してたのでは思



いつかないような話題が次々と湧いてきます。そんなその人にまつわる小さな情報をできるかぎり多く集めて、その中にその人の強みを見つけたいんです。

街路樹を指して「これ、〇〇の木ですよね？」と尋ねてみると、まるで無反応な人もいなくはないですけど、「うちの田舎ではこれはこれこれこうだ」と堰を切ったように昔話が語られることもあります。はたまた、公園で遊ぶ子どもたちへの反応から、子どもや動物好きな人柄が見えてきたり。

そうやって少しずつ、その人がどんなところなら落ち着くか、どういふところに住みたいかが



見えてくるんですね。都電が走る風景、古いお豆腐屋さん、線路脇のバラ、雑司ヶ谷霊園、「三丁目の夕日」的な風景が落ち着く昭和世代。サンシャイン周辺で出会うコスプレ、執事カフェ、BOOKOFF、そんな場所に「食いつく」若い人たち。ラーメン店前の行列、ラブホテル街、頭上の首都高速に興奮する、上京したての青年などなど。そんな「好み」の一つ一つが、その人の「強み」なんです。

歩き方にしても、せっかちだったり、ゆっくりだったり、やけにくっついて歩いたり、離れたり、これも人それぞれですね。とにかく驚きの連続です。強面のDさんが草花やペットが大好きとか、中卒のEさんはクラス一の秀才だったとか。刑務所を出たり入ったりしてた鷹職のFさんが調理師免許を持ってたりとか。そうそう、なぜか将棋好きの人が多いですね。塀の向こう側での経験をお持ちの方が多いということもあるのでしょうか。かくして、将棋好きの坂内さんは、将棋を指して人物を見極めていらっしゃる。

そして、こんな盛りだくさんな一日の最後にはスタッフ会議が待っています。坂内さん、世界の医療団の中村さん、訪問看護センターKazocの渡辺さん、山内さん。週に何度かはこのあたりのメンバーで、日中プログラム終了後のハナマイ(世界の医療団事務所)に集まります。こないだは区役所近くのファミレスに三々五々集まって、気づいたら6時間話してましたね。私は途中でいったん店を出て、区役所の用事を片づけてから、会議続行中のファミレスに戻り、「最初にオーダーしたドリンクバーってまだ続いているのかな?」なんて(笑)。ここで情報をシェアして支援方法を決め、役割分担をします。

具体的にどんな内容か、ですか? そうですね、こないだだったら例えば、小室アパート(当事者を積極的に受け入れてくださる素敵な大家さんのアパート)に入居予定の人のことについて話しました。医療機関受診の必要性から、とにかく早く手続きを進めて契約書持って役所に行きたいというのは一致した意見だったのですが、でもちよっと待てよ、事前に大家さんにその人のことをきちんと説明して、それから当人と面談に進めて、小室さんの思いに傾聴しつつ、引き受けについてゆっくり結論を出していただこう、入居の暁には長いお付き合いになるのだから、そんな話になりました。いざ蓋を開けてみれば、面談当日に即契約となり、しかも「きょうから泊まってみれば」と、涙の出るような優しい申し出をしてくださり、そのまま入居とあいなったので、結果としては同じことになるんですが、こうしたステップ一つ一つについて当事者の理解と同意を欠いたままに進めると、人というのはどうしても「させられた感」をもってしまうんです。「自分で決めた」という気持ちを大事にしたんです。新生活へのモチベーションが全然違います。

ワーカールの4人(坂内さん、中村さん、山内さん、私)はスマホのLINEを使って常時連絡を取り合っています。いまポトムでこんなことがありましたとか、あれについてはこんなことを考えてますなどと呟くと、〇〇さんにはこうしたらどうかこんな社会資源もありますよ、という具合に次々と返事がかえってきます。夜回りのある水曜の夜などは23時過ぎまでLINEでのやり取りは続くので、翌朝ポトムに行く際、新しく入ったのは誰と誰で、どんな人たちかなど予備知識を得られ安心です。

Q 毎日、そんなことをされていたんですか。大変ですが、エキサイティングなことですよ。ところで、どうしてこんな薄給のNPOスタッフになっちゃったんですか?

カナダで哲学の博士号をとって帰国し、慶応、明治学院、早稲田大学で哲学と論理学、それから英語を10年間教えました。教材としてビッグイシュー(路上生活者だけが売ることのできるストリートマガジン)を使ったり、応用倫理のクラスでホームレス問題を取り上げたりしたのがきっかけで、この問題に関心を持つようになりました。



それから、それとは別に、学期途中で学校からいなくなってしまう学生たちのことを考えていたんです。どうしているのか、どこへ行ってしまっただろうかと。

Q どうしていなくなっちゃうんですか

いま考えてみれば、発達障がい由来の問題とか鬱病とか、いろいろな理由があったのでしよう。いずれにせよ、ネットカフェ難民とか若者ホームレスとか、そうしたことが社会的問題として認知されつつあった頃だったんです。それで私自身、こういう若い人たちが直面している問題は彼らの抱える心の問題と密接に関連していて、それを視野に入れた支援が必要なんだろうな、でも何をしたらいいのかなとぼんやり考えていたんで

す。そんなときに偶々ビッグイシューで「東京プロジェクト」がファイザーの賞を取った記事を読みました。「自分がぼんやり考えてたことを現に実践している人たちが池袋にいるじゃないか！」、そう小躍りして、初めて炊き出しに参加したのが2012年9月末でした。しばらくして、生活応援活動を手伝いたいと坂内さんに申し出たら、Gさんの訪問やってみますかって誘われて。後日みんなから「いきなりそんなヘビーな人についての」とびつくりされましたが、当方は初めてですから、こんなもんなんだろうなと。でも、精神障がいをもった人に接してみても、やはり素人判断ではなくてきちんとしておくべきことは知っておかないと、そう考えて2013年4月から精神保健福祉士養成校に一年間通いました。在学中にGさん訪問の記録をレポートにまとめて授業で発表したのですが、それを坂内さんと吉野さんにも読んでもらったんですね。そしたらそれがスタッフの間に回覧されたようで、てのはしに誘われました。

Q では、これからどういうこ

とをしようと考えていますか。

今、やりたいのは、一人一人について支援計画を作成することなんです。路上を脱してアパート入居できればそれでよしということではなく、その過程で丁寧な聞き取りをし、アセスメントを行った上で、ご本人と生活応援スタッフで話し合っただけで支援計画を立案し、必要に応じて変更などを加えながらも、それに沿って継続的な支援をしていきたいんです。現在はまだ暗中模索の状態なのですが、この試みもたらした嬉しい副産物として、アパート転宅申請とか、アパート賃貸申込のさいに、福祉事務所や不動産屋さんに支援計画を提出することで、手続きがスムーズに運んだり、手続き後の関係が潤滑に進むという事例が出ています。

最近、累犯障がい者（孤立無援の障がい者で、生きるために何度も犯罪を起こして刑務所に入る方々）についての学習会を受講して知ったのですが、裁判官も、こういう、障がいのある人・特に高齢の人を刑務所に入れたくなくて苦渋の選択を迫られているんですね。「福祉の側

で支援計画を立ててくれれば、そちらに任せたい」という思いもあるのではないだろうか。司法と福祉、お役所と私たちNPOの間の溝を埋めることで、そこに落ち込んで苦しむ人を減らしたいです。

そのためには、社会調査に類する活動も行う必要があると考えています。現在、ある大学の研究室と共同して、東京プロジェクトの支援活動の現場からの報告を研究の形にまとめようという話が持ち上がっています。これは私たちが課題の一つとして捉えている活動のデータ化、情報蓄積、活動の「伝承」の一助ともなるはずですよ。

でも、私にとって何よりも大事なことは、目の前にいるこの人あの人への幸せです。様々な障がいや問題を抱え、「処遇困難」なるレッテルを貼られる人たちが、自分の内の「魔」と闘っている人たちが。彼らの生きづらさが少しでも軽減すれば。そう思います。てのはし参加以前も、学問を修めることは、人が幸せになることを目的としていました。ですから、研究者からソーシャルワーカーへの移行に飛躍はありません。

ある日の 炊き出し

顔なじみのAさんに久しぶりに会った。Aさんは池袋で10年以上前から路上生活を続けている。

久しぶりですね。最近はどうしてます？

まあ別に変わりはないよ。

今もアルミ缶やってるんですか？（自販機のゴミ箱などからアルミ缶を集めて売ること。最近の回収価格はロング缶五〇〇個で千円くらい）

いや、いまは山手線の某駅でビッグイッシュ（路上生活者が売る雑誌。1冊300円で、160円が販売者の収入）売ってる。

あらびつくり。販売者になったんですね。売れます？

いやー、駄目だね。一日15冊か、よくて20冊だね。1日の収入が二千円ちよつとだろ、それで交通費と食費を出したら千円も残らない。だから相変わらず野宿だよ。

ビッグイッシュ売ってアパート生活っていう人は全国で五人も居ないんじゃないかな。

そうですね・・・やっぱり厳しいですね。体調はどうですか。

腰が駄目だからね、力仕事は出来ないよ。あとは何でもないかな。2年くらい前は大変だったけどね・・・（何が？と聞いても答えてくれなかった）

最近はどこで寝てるんですか？

池袋の某ビルの軒下。でも最近厳しくなってるね、段ボールも前は置いておけたのに今は毎日捨てられちゃうから、新しいのを探さないといけない。段ボールも最近もらえるところが減ったから大変だよ。

夏なんだから、段ボールは下に敷くだけでいいんじゃないですか。

そう思うだろ、ところが段ボールで周りを囲っておかないとあぶないんだ。

襲撃ですか？

そう。酔っ払いが段ボールをガンガン蹴る。

いつもやるやつが居て、この前捕まえたんだ。「何すんだ、バカヤロ」とか言ったって聞きやしないからさ、「あんた、情けないねえ。こんなホームレスいじめて、情けない人だねえ」と言っちゃった。そして、それから来なくなったよ。

そいつ一人ですか？

いやいや。いろんなのがいるよ。蹴飛ばしたり傘で叩いたり。

酔っ払いが、段ボールハウスをベンチと間違えてよつこらしよつて座ることもある。いきなり天井が落ちてきて、びつくりしたよ。

飲みかけの缶をわざと段ボールハウスの出入り口に仕掛けられたこともあった。出ようとしたら中にバシャーつとかかるんだ。頭くるよ。だからさ、段ボールハウスの道路側の壁を二重にして、道路側か

ら蹴られても大丈夫にしているやつも居る。

みんな大変ですね。Aさん、65過ぎたし、生活保護とったらどうですか。

いやいや、とんでもない。生保とってたって、入れられるのは大部屋の寮だろ。飯はまずいし酒は飲めないし、門限が6時とかだろ。子どもじゃあるまいし、そんなところに行くくらいだったら今の方がいい。

じゃあ、アパート世話しますって言うたら？

どうかな。身体が動くうちは自分で稼ぐよ。

じゃ、動かなくなったら言うってくださいね。いい部屋探しておきますよ。



3. 11被災地見聞ツアー

語り部の渡邊さんは、
「今年の3月から津波の夢
を見るようになりました」
と、淡々と語った。

調理班・浅井次郎

TENOHASI鍼灸班の石
崎さんが企画した3.11被災
地見聞ツアー第4回(8月2日
3日)に参加してきました。



見聞ツアー2日目。

宮城県山元町の語り部・渡邊さんは、案内してくれた旧中浜小学校の屋上倉庫(52名の生徒がそこに避難して津波から逃れ、そのまま気温2℃、食料も水もない真つ暗闇の一夜を過ごした)で、私達に淡々と、「今年の3月からなぜか津波の夢を見るようになりました」と語りました。震災から3年以上を経験して解放される夢ではなく、やっとなものなんでしょうか。

想像に余りあるものがあります。もしかしたら多くの被災者の人々の心の中でも同じようなことが起きているのかもしれない。表立っては「日常生活を取り戻したとしても、心の中では“震災”という“非日常”が居座ってしまったているという事なのではないでしょうか。

渡邊さんは、山元町で中学校の校長をやっておられた方で、ご自身が体験した”大津波“の実相とそうした災害に向き合う教訓を次世代、次々世

代に語り継ぐ必要を痛感して、「山元町語り部の会」を立ち上げ、私たちのように山元町を訪れるボランティアグループ等に、山元町の被災現場を案内しています。渡邊さんは最後に、「大津波の実相と教訓を、持ち帰ってもらい、各々の生活の中から発信してもらおうこと」の必要性を強調しておられました。

渡邊さんだけではなく、今回のツアーでは、大震災の中でのご自身の壮絶な体験の中から、紡ぎだした私たちの胸に届くお話、復興に向けた各々の立場から、復元をいくつもお伺いすることができました。印象に残った方のお話と、印象に残った場所をいくつか・・・。

・福島市・大友農園さん

(桃・サクランボ・稲作農家)

あつてはならない東電からの賠償金の延滞、原発事故による「風評被害」(実際に放射能が検出される農作物があることを前提としつつも)にも耐えるだけの質を持った農作物を出荷するために必要な土壌改善、機械・設備への投資等、経済的にも多くの負担を抱えながらも、全品検査という手のかかる出荷方

法を選択して地道に販路を開拓する大友さんの今後を語る力強い言葉に、農業に携わり、今後大きな困難にまみえる事を覚悟しつつも、農業を生業として福島で生き続けることを選択した農家の矜持を見た思いでした。とてもおいしい桃をたくさん試食させていただきました。

・飯館村を通り過ぎる・・・

大友農園から南相馬市へ。手に持った線量計の数字が上がり続ける飯館村を通り過ぎる時、川上弘美さんという小説家の書いた「神様の話2011」という掌編小説を思い浮かべていました。「神様の話2011」は、「神様の話」という自らの小説を、3.11の福島第一原発事故を受けて改作したもので、その小説の世界には子どもや子どもを中心とした親密な家族の“日常”はありません。防護服を着た人が作業しているような“非日常”があるだけです。かつて畑や田んぼであり、今は雑草が生い茂った荒涼とした飯館村の土地の風景を眺めつつ、3年前の3.11の原発震災以前、飯館村で生活していた人々の活気ある日常生活を想像して、言



いようのない悲しさと憤りを感
じました。

・放射能測定センター・南相馬
「とどけ鳥」

市民による放射線防護運動は
全国各地で展開されていて、食
品・水・土壌の放射線量の測定
はその活動の軸になっています。
南相馬の測定センターの設立目
的は「測定値を共有し、子供に
伝える知恵を身に着け、発信す
る」ということで、いまだに「帰
還困難区域」という高線量地域
を抱える南相馬市では喫緊の課

題ということでした。福島県で
の子供たちの甲状腺がんの多発
が伝えられる今、子供を放射線
被爆から守るといふ強い思いが
伝わってくるお話でした。

・南相馬市・桜井市長さん

「国や東電と闘い続ける」と
いう自らの政治信条を、風邪気
味ということ、ややかすれた
声で訥々と語っておられました。
「原発と命は両立できないとい
うことは3・11以降で立証さ
れたはずだ」という「脱原発」
の強い思いが伺えるとともに、

南相馬市の人々が何故、震
災以後の市長選で“国との
パイプを持たない”桜井市
長を選んだのがじわじわと
伝わってくるお話でした。
誠実さと大胆さとを備えた
とても魅力的な政治家とお
見受けしました。

・南相馬市学校給食センタ
ー・主任栄養士鈴木さん

ご自身の家族が、原発事
故による避難で県外も含め
て4か所に引き裂かれなが
らも、南相馬市学校給食セ
ンターの主任栄養士として、
調理員、教職員を牽引し、

協働しながら、震災直後の4月
22日から「炊き出し給食」を
継続したお話には感動すると
もに、震災の混乱の只中で、様
々な理由で避難することができ
ずに、南相馬市に残った子供た
ちの命のために、食料、物資等
を調達するために奔走する「エ
ネルギー」と「工夫」に満ちた
取り組みには、驚かされました。
現在は、放射線から子どもた
ちの体を守る取り組みとして、
給食の安全確認のために、産地
確認、食料事前検査を実施して
いるということ、原発事故の
もたらした問題の根深さを感じ
させるお話でした。

3年半を経て、いまだに仮設
住宅に住まい、コミュニティ
が崩壊した状況の中で、不便と
孤独と疲弊を強いられている被
災者の生活に象徴される一向に
「加速化」しない被災地の復興
の現状。

やっと出来た復興住宅に入居
するにも、多額の金銭的な負担
が求められ、多分そのことが主
要な理由で、入居希望者が少な
い現状（語り部・渡邊さんから
聞いた現在募集中の山元町の復
興住宅の現状）、原発事故の影

響で14万人以上の人々が、望
まぬ避難生活をしていて「帰還」
できない現状。汚染水すらコン
トロール不可能で、収束には程
遠い福島第一原発の現状を尻目
に、再稼働と原発輸出を議論む
自公政府の腐敗。「除染」とい
う利権にゼネコンが群がる現状。
大津波からの復興も、原発震災
も未だしの状況の中で、私たち
の周囲には、震災を無かったこ
とにするかのような動きが、様
々な場面で強まっているように
も思います。そして残念なこと
に多くの人々が、そうした動き
に自らつき従っているようにも
私には思えます。そのような状
況に抗うためにも、今回のツア
ーで出会った人々から聞いたお
話、被災者の声を様々な場面で、
人々に伝えていく必要性ととも
に、現状を一步でも前に進める
様々な行動に参加する必要を強
く感じました。津波被害と原発
震災の現状に憤る人々にとって
はすでに手垢のついた言葉なの
かもしれませんが、“まだ何も
終わっていない”ということ、
改めて強く印象付けられた3・
11被災地見学ツアーでした。

はっぴいめーかー大募集

□ ボランティア募集

- 炊き出し 毎月第2/第4土曜日
調理班（* 文京区のお寺集合） 11:00～18:00
非公開ですのでメールや電話でお問い合わせ下さい
公園班（東池袋中央公園集合） 16:40～19:30 ごろ
* 4月から時間が変更になりました。ご注意ください。
鍼灸・マッサージ 16:00～18:00
医療相談 生活福祉相談 17:00～18:30
ほっと友の会（お茶会・第4土曜日のみ） 17:00～18:00

○おにぎり配布と夜回り

毎週水曜日（池袋駅前公園集合） 21:20～22:30

TENOHASIのボランティアはアポなし・参加できる時間だけ・1回だけでもOKです。

□ 活動資金のカンパをおねがいします！！

郵便振替 00190-8-259686 特定非営利活動法人TENOHASI

振込 ゆうちょ銀行 019(ゼロイチキュウ)支店 当座 259686 トクヒ) テノハシ

□ 物資カンパも大募集中！！

衣類（これからは秋物を。スーツと女性ものは不要）・靴・毛布・カミソリなど
食材（缶詰・レトルト食品など）

【送り先】〒177-0045 練馬区石神井台6-1-28 清野賢司 TEL090-1611-1970

（夜間指定をお願いします）

お問い合わせは

メール：TENOHASIのホームページの「お問い合わせ」から

電話：090-1611-1970(事務局長 清野賢司 平日は18時以降)

特定非営利活動法人TENOHASI

会報第29号

2014/9/1発行

- ホームページ <http://tenohasi.org/>
 メール tenohasi@yahoo.co.jp

発送元

NPO法人TENOHASI事務局

TEL 090-1611-1970

（事務局長 清野賢司）

